豊橋市美術博物館友の会だより
−2008年−秋号 Vol.70

FU風伯HAKU
Autumn 2008

寄稿

第4回トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展を終えて

早いもので、故・星野眞吾氏の遺志を受け、後進の顕彰と育成に寄与するべく設立されたトリエンナーレ豊橋も1999年の第1回展から10年の時が流れました。星野眞吾美術振興基金をもとに賞の理念がどのように設定され、公募展の実施に至ったかは、風伯35号に詳しく述べられているため、ここでは再度繰り返しませんが、この10年で目的と意義、そしてなにより存在そのものが定着してきたといえるでしょう。出品数の変遷では「お試し」的な応募の多かった第1回展の後、傾向とレベルが周知されて一時減少はしたものの、第3回から比較的安定しており、リピーター率も高いようです。また、注目すべきは若い層からの積極的な参加で、今回は20代の応募が100人を越える(全体の約4割)結果となりました。これは、美術系大学への公募要項送付等の呼びかけ効果の表れでもあり、若い世代への援助を目的とした故人の遺志にも適うものです。

展覧会を訪れた鑑賞者層についても同様で、アンケートに対する20代の回答者も多く、それは近代美術を主体とする従来の展覧会とは異なる傾向でした。回答をみると〈明日の日本画〉というテーマへの反応も多く、「新しさを追求する余り本来の日本画の良さを逸脱している向きもある」「日本画展の呼称はやめるべき」との声もあり、内容への批判も含めて賛否あったことも事実です。この「日本画」の括りについては、もはやあらゆるジャンルがボーダレスになっている現在、イメージが固定するとして当初より懐疑的な意見もありました。実際、「日本画」とは明治初期に外来の西洋画と区別するためにつくられた概念であり、大和絵も琳派も南画も漢画もひっくるめてそれまでのジャンルを総括したものです。さらに表現も技法も多様になった現在、もはや岩絵具・水干絵具・膠・墨などを用いた画という素材の区別になってきていますが、本展ではその素材すらも制限せず、「日本画」という言葉を出品者や鑑賞者に投げかけ、そこに波紋を生み出すことを期しております。油彩もアクリルもミクストメディアも受け入れているため、これまでにも出品者から「日本画」とはどういう主旨なのかとの問い合わせが数多くありましたが、その問いかけや惑い、新しい解釈や表現の発見こそが本展のねらいでもあるわけです。

会場風景

星野眞吾らが目指した日本画の革新は従来の概念を突き崩すことから始まり、シュルレアリスム・抽象表現主義など西洋の潮流を試行しつつ、独自の、真に自由な日本画を確立したことは周知のとおりです。しかし、星野自身が求道者のようにその生涯で突き詰めたとおり、日本画に終着点はなく、ましてや完成様式があるわけでもありません。日本という風土のなかで生み出すわれわれの絵画＝日本画とは何か、次代を担う画家たちの答えがどのようなものか、本展の意義と楽しみ、そして他の公募展との差異はそこにこそあるわけです。それでも出品作をみわたすと、素材はもとより日本的あるいは東洋的なニュアンスや意識を感じさせる作品も多々みられました。たとえば、大賞となった加藤良造《山水境》はいわゆる中国北宋の山水画をモティーフとしており、優秀賞のマツダジュンイチ《面壁》は一見多様な解釈ができる抽象表現にもみえますが、主題は達磨の面壁九年の故事に由来します。また、日本・東洋画の基本的な素材である墨をさまざまな表現で呈示した作品(あるいは墨画のような印象を与えるもの)も多く、全体にモノクロームの印象を強く受けた方もいるのではないでしょうか。墨を主題とした作品には、着彩画に比べてより先鋭的・抽象的な表現をとる傾向があるようにも感じられます。龍や唐獅子など伝統的なモティーフもあり、金箔や屏風や軸といった形態のもつ効果も楽しめる展開となりました。ただ、皆一様にレベルが高くなってきてはいるが、突出した作品がない、という意見が全審査員に共通していたことも申し添えておかなくてはならないでしょう。

もう一つの傾向として「マンガ、アニメーション、イラストレーションをはじめとするサブカルチャーの影響が今回の応募作の一部に表れていた」という三頭谷鷹史審査員の指摘があるとおり、若い世相の嗜好と表現媒体を反映したかのような作品が多くみられました。審査員推奨の《インセト・グラシオソ》をはじめ、映像の表現効果を思わせる《セルフ》、若い女性のリリカルで夢想的な世界を描く《Quand pleure la lune》や《夢とうつつ》もその範疇でしょう。実際、アンケートで実施した人気投票では、若い世代の感性が支持を集め、表

	作者	年齢	作品	得票	備考
1	渡辺　崇	27	セルフ	7	審査員推奨
2	加藤良造	43	山水境	6	大賞
3	奥住哉太	22	インセト・グラシオソ	5	審査員推奨
4	梅木雅子	27	Quand pleure la lune	3	優秀賞
	米岡響子	29	一瞬の集積	3	
	金　未来	25	夢とうつつ	3	審査員推奨

※年齢は出品時のものです。大賞・優秀賞の作品図版は前号に掲載。

渡辺崇「セルフ」

奥住哉太「インセト・グラシオソ」

のような結果となりました。

今後の課題としては、表現の可能性を広げるため、サイズ規定の拡大(現在は120号)、立体やインスタレーションの受容などの意見が審査員より提示されました。現在の受容スペースと展示室の規模を考慮すると、必然的に入選数を減らすことになり、なかでも後者は日本画のさらなる拡大解釈を促すことにもつながるでしょう。今後、どのような方向性を持つとしても、ひとつだけ言えることは本展が定着しつつある現在、その流れを止めてはならないということです。美術館を取り巻く状況が年ごとに厳しくなっている昨今、大型の公募展を継続してゆくことは至難ですが、審査員長の針生一郎氏は表彰式の冒頭挨拶で、トリエンナーレを続けることで見えてくるものがある、と語っています。

アンケートで継続に関する質問を設けたところ、63名のうち53名が「継続すべき」と回答（回数を減らすべき2名／継続すべきでない2名／わからない2名／他は無回答)。「継続してこそ若手の道が開けてゆく」「次世代を担う若い人達の芽をのばすためにも必要」という意見がある一方で、「継続すべきでない」方の意見は「これが日本画の世界とは思えない」「美術は見た人の心安らぐものでなくてはならない。この展示物は不安を感じさせる物が多い」というものでした。ジェネレーションギャップや異なる価値観への拒絶を解消してゆくためにも、本展を軸に、戦後の前衛日本画から現代までの動向を検証する展覧会の企画や、これまでの受賞者の活動を紹介する個展の開催など、果たすべきことはまだまだあると思います。　（豊橋市美術博物館学芸員　丸地加奈子）

ー新春遊戯ー すごろく展

展覧会紹介

12月13日[土]～1月25日[日](月曜休館　ただし祝日の場合は翌日休館　12／29～1／3休館)　二川宿本陣資料館

かつて正月の子供の遊びといえば、双六・福笑い・羽子板・凧揚げなどがありました。なかでも双六は、少年・少女雑誌の正月号の付録として子供たちに親しまれ、「ふりだし」から「あがり」までサイコロを振りコマを進めるゲームでした。途中には「１回休み」や「○○へ戻る」、「□□へ進む」など趣向をこらしたルールがありました。

双六は、弥次さん喜多さんが東海道を行く「道中双六」や、各地の名所を巡るもの、科学や動物などを取り上げるものなどいろいろなテーマで制作され、遊びであるとともに子供の興味により学習の一助にもなりました。

この展覧会では、江戸時代から現代にいたる様々な双六を展示・紹介します。子供の頃に楽しんだ双六、いにしえの正月の風景に思いをはせ、双六を通して昭和へとタイムスリップしてみませんか。

「豊橋一流商店めぐり双ろく」豊橋市美術博物館蔵

「豊橋市美術博物館の現実と課題」 その2

「何が原因でこのような現実があるのか」

地域における文化行政はなぜこのようになっているのか

前号では豊橋市美術博物館の置かれている現実について報告しました。読まれた会員の方からは「今まで知らなかった美術博物館の背景と構造がよくわかり、また違う観点で絵や作品を見ることができるようになった」との感想が寄せられました。今回はさらに、なぜそのような現実があるのか、その背景や原因について取り上げてみました。

30年前、美術博物館の建物はどのような基本方針で設計され、どのような経緯で作り上げられたものなのか？

①昭和50年度に元となる基本計画案が作成され、昭和51年4月に文化会館の運営委員会に諮問し、同年8月に答申を受けて競技設計しています。豊橋公園内に建設するということで、吉田城址などの文化財を守り、環境の保全に留意し、木を切らず、自然の景観に溶け込める、開放的な建物としてデザインされました。

②当初は市民ギャラリーと郷土資料室が合体したような施設でした。しかし、開館後のギャラリーは借り手が少なく、ギャラリーだけでは開館し続けられない状況であったため、より多くの自主企画展が必要となり、いろいろな展覧会を企画しました。そうした経緯の中に美術系博物館になっていく要素があり、館に対する認識が変わってきたのです。

なぜ、美術博物館は「課」扱いで、館長は非常勤嘱託なのか？

美術博物館長については、平成5年3月までは専任館長、ただし文化振興課長兼務という形でした。その後、元教育長が嘱託の館長となりました。しかし、全国に通用するような館長をと、前館長の藤井先生、そして現在の金原館長へと至っています。金沢21世紀美術館の初代館長は金沢市の助役と兼務で、市と一体となった運営がなされていましたが、豊橋市の体制ではそこまでは難しいと思われます。

行政は文化・芸術をどのような位置付けとしているのか？

①昭和54年のオープン時は、文化会館と合わせた文化課としてスタートしています。その後、新しくできた図書館を加え3つの施設で1つの課となりました。平成12年度までこの体制が続き、美術博物館は文化振興課の中の一施設であり、組織の上では「係」という位置付けでした。

②その後、美術博物館から一旦は本課（文化振興課）へ移った文化財係を再び統合し、館内にその係が増えて課として独立しました。美術博物館は、博物館機能だけでなく市史の編纂や文化財行政も行っています。

③豊橋市の総合計画の中で文化環境の整備という項目がありますが、第4次の改訂版では財政計画の見通しが非常に悪くなってきて、施設整備計画などは具体的に表記されなくなりました。

美術博物館の寿命を考えたとき、なぜ30年で収蔵庫が一杯になってしまう設計だったのか？

①昭和42年に豊橋市民文化会館が建設されていますが、そこでの3つの機能、図書館・集会場・展示場がそれぞれ手狭となり、展示機能を独立させる目的で昭和54年に美術博物館を建設しました。開館当時は、ギャラリーという認識はあっても、美術館という認識や概念があったわけではないのです。

②現在、収蔵庫はすでにいっぱいで、収蔵棚の改修はしたものの庫内の床面にも台車を置いて作品を積んでいる状態です。かりに作品寄付のお申出をいただいても、物理的な事情によってみすみす重要な作品を受け入れられないこともあり得ますから、収蔵庫はきちんと確保したいと考えているようです。

現在まで必要な増改築はきちんと行われてきているのか？

①開館10周年に、展示室の壁面や天井部分のルーバーの改修をしています。喫茶室をラウンジから外に移転したり、展示パネルの構造を変えたりもしました。
目立たないかも知れませんが、照明も替え、調光もできるようになりました。空調機の更新についても、平成14年から今までずっとやってきています。この20年度には、温度制御を行える機械に取り替えるなど、年次計画を立てて予算要求を行いメンテナンスしています。

②一番の問題は、1,000点以上の美術系コレクションを収蔵しながら、常時展示できる点数が極端に限られるということです。2階の展示室を全部使って常設展示できる規模が望ましいように思います。そうでなければ、もったいない。宝の持ち腐れです。歴史系コレクションについても同じことが言えます。

新築の話はなぜ途中で変更になってしまったのか？

①平成12年度に豊橋市の第4次基本構想・基本計画の主要施策と位置付けられ、新美術博物館構想としては、平成13年に整備事業基本計画として策定されました。翌年には、基本設計にいくはずでした。

②過去に美術館・博物館を造ってきた大手設計事務所だ

けに任せてしまっては、当たり前のものになる不安があり、より良い方法を選択していただきたいと、友の会が中心となって、市長に「新美術博物館設計コンペに関する意見」を提出しました。この提案は市に一定の評価を受け、指名であるプロポーザルからコンペに変更になりました。それから、設計者選定手法等検討委員会ができました。

③財政的な問題で延期になったのであり、市としては4次総合計画で作ろうと決めていたものです。必要性があり、議会も通っていました。ただ方法について変更しただけのはずです。

学校教育の中で芸術はどのように教育したらよいのか？

①情操教育につなげていくことは、非常に重要だと思っています。現在は副館長が校長会に出かけ、展覧会等の説明をし、PRをしています。また学芸員が学校で出前授業をすることもあります。

②カナダの方に聞くと、小学生の時から学校行事でオペラを観たり、美術展に行ったり、コンサートを聴くなどしているそうです。芸術に接して感動することが、人間にとって必要だと進めているとのことでした。

③欧米の美術館を回っていますと、必ずグループで小学生など来ていまして、教師が絵の前に座らせて感想など発表させています。この絵をどう感じるのか、感性のトレーニングをしているわけですね。日本だと、知識としては教えるけれど、感じるということは教えていないように思います。

④なぜ子どもが育つところにもっと力を注がないのかと疑問です。心にも栄養が必要で、芸術が人間形成に大きな意味があると認識すれば、美術館が子どもの育成に欠かせない場となります。

⑤今年3月に新しい小・中学校の新学習指導要領が出まして、地域の美術館・博物館等の施設と連携を図り、積極的に活用すること、とあります。学校とのタイアップは必要になってきています。

今の行政の中で個性的なことは認められないのか？

①個性的な美術館といえば、イギリスのテートモダンが成功しています。元発電所を改造してつくったわけですが、広大な空間を再利用し、現代美術を置いて見せています。観光スポットとしてもかなりの収益をあげ、経済効果もあるようです。豊橋の場合、二川地区に自然史博物館・地下資源館・二川宿本陣資料館があり、あの地区を総合博物館にするという案も考えられます。どういう路線を歩み、個性を出していくかです。

②企画展だけでなく、ワークショップでアピールする方法も考えられます。美術博物館では、この夏の絵本原画展で絵本作家のスズキコージさんを迎えて壁画の共同制作やパレードをしたのですが、子どもたちの反応がすごく良かったですね。親たちも真剣に取り組んでいました。

美術博物館の評価はどのようにされているのか？本来どのようにされるべきものなのか？

①行政評価としては、予算や決算、集客の人数など、一年を通じての評価がされています。今年6月に博物館法が改正され、博物館独自の評価を促しています。それを積極的にやっているのが静岡県立美術館です。

②第三者委員会を作って外部の人が、美術館の自己評価はどうだったか、行政自体が美術館に対してどんなふうにサポートしているかという評点までやる、という形が必要ではないでしょうか。

③美術博物館としての自己評価と、友の会を含めた外部の評価と、実際に美術館を利用している方々の評価という3つがそろわないと本当の評価にはならないと思います。

学芸員の立場は欧米に比較し、なぜここまで違うのか？

①欧米のキュレーター（学芸員）は大学の教授に相当するもので、資格の取得が難しいのに対し、日本では大学で単位を取得すれば簡単に学芸員の資格が取れます。そして欧米では学芸員がイベントの企画から資金集めまで全て責任と権限を持って行うシステムです。

②欧米の美術館では、かなり大勢のスタッフがいて機能分化しています。キュレーターは研究責任者、収蔵品を管理するコレクション・マネージャー、エデュケーターは教育担当です。普及活動をする担当もいて、出版編集専門もいます。他にも調査、プラン、修復など専門が細分化されています。日本ではそれら全てを1人の学芸員がやったりしているわけです。

行政の中での美術博物館の位置付け以外に、私たちの生活の中に美術博物館をどう位置付けたいのか、ということを明確にし、その収蔵品と運営と建物はどうあるべきなのかを、「友の会」の会員も一緒になって考え、その理想を共有できればもっとエネルギーがわいてくるのではないかと思います。

行政の立場、美術博物館の現場の声や意見もあります。このように様々な視点から議論を重ねていくことで、これからの豊橋市美術博物館の進むべき方向が見えてくるはずだと考えています。

このシリーズへのご意見をお待ちしています。

（風伯編集部）

友から友へ Members to Members

直島－安藤忠雄さんを楽しむ

鈴木準之助(46)

先の友の会の研修旅行から帰ってきた妻が、夢見心地でもう一度行きたいといっていた"直島"。現代アートはあまり得手でない自分が、なぜ直島へ行こうと思ったかといえば、自然と一体化したという安藤忠雄さんの作品群が見られるということからだ。

直島に到着。すぐに"家プロジェクト"の見学。護王神社は拝殿の地下に入れなかったのは残念であったが、巨大な石の上に置かれた本殿、拝殿やガラスの階段など近代的なものと、古い精神性が溶け合っていて面白い。神事はどんな風に行なうのだろうか？水の中に沈められた数字が点滅する「角屋」。微妙な光が差し込む黒漆の床の蔵の中に千住博の"ザ・フォールズ"が壁一杯に掛けられた「石橋」。真暗闇の中で、やがて眼が慣れてくると光を感じてくる「南寺」(安藤忠雄設計の焼杉板の壁が美しい。)など、現代アートもなかなかのものだなと感心させられた。

次はこのツアーのメインでもある"地中美術館"。クロード・モネの「睡蓮の池」と他に二つの現代美術作品を展示するために、安藤忠雄さんが設計した。そのほとんどが地中に埋って外観の無い建築物。三つの作品も含めて、その必然性が感じられないし、感動も湧かない。見終ってカフェのテラスから眺めた瀬戸内海の素晴しさや、後で見た"オーバル・ホテル"の完成度の高さとは対照的で、今一つ不満が残った。

夕食後、物足りなさの気持を持ったまま(ホテルの夕食の不満もあって)、ベネッセハウスのミュージアムに夜間特別鑑賞。建物は地形にそって半分を地中に埋めて迷路のようになっている。直島における安藤さんの最初の作品。中の作品は建物に合わせて現場で作ったものだそうだ。壁に置かれた「雑草」という木彫や、室内の絵のボートと砂浜に置かれたボートなど、作者の熱気と機智が感じられ、翌朝ももう一度鑑賞するほど楽しめた。

猪熊弦一郎現代美術館を見学して

田中あや子(3037)

私の老いた感性で、現代アートが解るのかしらとの思いで、「猪熊弦一郎現代美術館」に来た。

まず美術館正面の白い壁に黒い太い線で描かれた、絵とも落書とも見える動物達に出会って驚いた。この壁画の前には、口から鋭い鏃が数多く出ている大きな巻貝のオブジェがあって、私はとっさに「でんでん虫」の童謡がモチーフになっているのかな？と感じ、耳に懐かしい「でんでん虫」のメロディが聞こえたような気がした。個々の人によって、受け止め方や感じ方に違いがあってよいのだと思うが、他の人達には何に見えたのだろう。

階段を上ると、また変わったオブジェに出会う。このオブジェは本体を鑑賞するだけでなく、ガラスに映ること、反射することで、鑑賞の面白さ楽しさが倍増されていることを体験できた。

2階の展示室はゆっくり作品を鑑賞するには最適な空間だったし、ガラス越しに見える階下の図書室は明るく、ゆったり読書をしている人達がいて、心引かれる場所であった。画伯の作品には、個性的な色が種々使われているのに、お互いに邪魔をせず、個々の色が調和していて美しさが伝わってきた。描かれた80人の顔もよく見ると同じ顔は一つもなく、本当に、よく描いたものだとの想いの中で画伯の心の内を見てみたい気持ちがした。

3階はビビロッティの展示場になっていて、映像も現代アートなのだと知り、ここの壁面に赤、紫、ゴールドに書き分けられた言葉があった。「今は四万年後…ルールなんてわからない　私達の文明はもういけない　きれいに旅立つことを計画しよう…新しいルールをでっちあげよう…あなたと結婚する　見知らぬあなたと…（略）」この言葉は、時代は変化していく、今にとらわれず、変化していくものを見つめ受け止め、考えていける感性が必要なのだということを私の心に刻んだ。

イサムノグチ庭園美術館を鑑賞して

神野志保子(239)

イサムノグチが日米で活躍した彫刻家であることは知っていたが、それ以上の知識はなかった。出発前日、思いついてインターネット検索をかけてみる。

アメリカ人の母親に抱かれて日本に来たとき、すでに父親には別の家庭があり、野口姓を名乗ることも許されなかった。14歳のとき、母親の方針でアメリカの学校へ送り込まれる。彫刻に才能を開花させはじめたころ、第二次世界大戦勃発。自ら日系人強制収容所に入るも日系人からは冷遇を受け、出所を希望すると今度はアメリカ側から拒否され……。幼少期から思春期にかけ、どんな感情が渦巻いていたことだろう。日米双方の文化と教養を受けつつ、どちらにも居場所がない。自分のアイデンティティをどう確立したのだろう。などと、イサムノグチへの関心が高まる。

さて、当日。石切り場の前でバスをおり、細い路地に入る。「え、こんなところにあるの？」思わずあたりを見回してしまったが、そこが、生前ノグチが愛し、日本での拠点として暮らした場所だった。

庄屋屋敷を移築した住居、その裏手に石を組み土で小山を築いた庭、古い土蔵を移築したアトリエと屋外の作業場。未完成の作品もふくめて、すべてノグチが配置したそのままを保っているという。

秋の日差しを浴びながら歩きまわっているうち、なぜか気持ちが広々としてきた。彼の作品には、あっても不思議ではないはずの孤独・葛藤・屈折の影がない。前向きで明るい。どこか希望まで感じられる。

そんな作風を反映してか、案内してくださる学芸員の言葉の端々からも築山につけられた帝の目からも、ノグチ本人と作品への深い敬愛と誇りが感じられ、ここちよく鑑賞できた。

美術館友の会旅行でなければ、あそこまで足を運ぶことはなかったと思う。すばらしい企画に、あらためて感謝申し上げる。

(p.6～7写真提供:高木　誠)

Museum Check　おでかけになりませんか？

会　場	会　期	展覧会名
桜ヶ丘ミュージアム	11月22日～12月21日	意識の襞　星野眞吾展
豊田市美術館	開催中～12月25日	不協和音　日本のアーティスト６人
愛知県美術館	開催中～12月23日	ライオネル・ファイニンガー展
名古屋市美術館	開催中～12月14日	20世紀のはじまり　ピカソとクレーの生きた時代
	12月23日～２月８日	クロード・モネ《印象・日の出》展
名古屋ボストン美術館	開催中～12月21日	ベリー＆ハリス　－泰平の眠りを覚ました男たち－
松坂屋美術館	11月22日～12月24日	イタリア美術とナポレオン展
	１月２日～２月１日	大三国志展－悠久の大地と人間ロマン－
古川美術館	開催中～12月21日	女流六人展－現代の王朝絵巻
平野美術館	開催中～12月14日	松井冬子展
静岡県立美術館	開催中～12月21日	風景ルルル
三重県立美術館	１月４日～２月22日	哀歓と詩情の画家　山口薫展
東京都美術館	１月24日～４月５日	生活と芸術 アーツ＆クラフツ展　ウィリアム・モリスから民芸まで
東京国立博物館	１月10日～３月８日	慶応義塾創立150年記念　「未来をひらく福澤諭吉」展
サントリー美術館	12月23日～１月26日	japan蒔絵－宮殿を飾る 東洋の煌めき－
三井記念美術館	12月10日～１月24日	「旧金剛宗家伝来能面」54面の重要文化財新指定記念 寿(ことほ)ぎと幽玄の美－国宝雪松図と能面－

収蔵品紹介

[穂高]

水越　武●MIZUKOSHI,Takeshi
2006年プリント（撮影年は下記記載）
各27.0cm×41.0cm

豊橋市に生まれた水越武は26歳のときに写真家・田淵行男の『高山蝶』に感銘を受け、同氏に師事して山岳写真家として活動をはじめました。なかでも「穂高」シリーズは写真家として最初に取り組んだ原点でもあります。当時の様子を自身で次のように語っています。

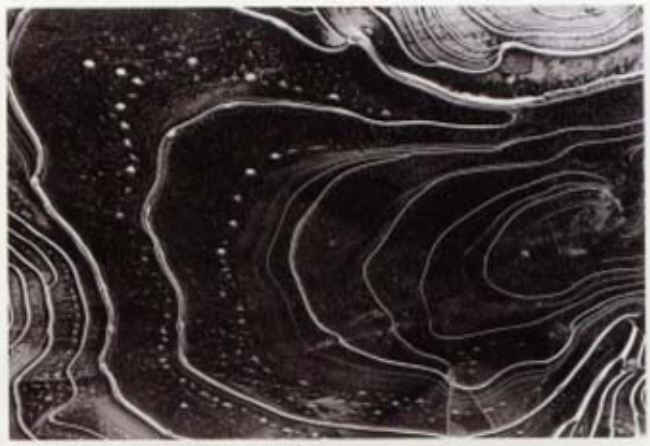
「年間200日も入山し、こだわり続けて10年、一途に穂高に集中した。…テントや雪洞で暮らし、いつ果てるとも知れぬ猛吹雪の中で、ゴーゴーと渡って行く風を一人で聞きながら、自分の理想とする写真が一枚できたら命と替えてもよい、などと真剣に考えていた。当時は1ヶ月も2ヶ月も下山せず、死に物狂いで自然と向き合っていた。思い出すだけで今でも胸が熱くなる。」

その成果ともいうべき最初の個展〈穂高〉（1971年／銀座ニコンサロン）では、「山頂のスカイラインで山容を表現してきた従来の手法とは対照的な作風」（山岳雑誌『岳人』より渡辺道明評）が新鮮であるとして評価を得ています。掲載図版のような雪の質感に肉迫した作品や抽象表現のような氷紋などは、そうした一例でしょう。師の田淵は「時折、彼は私の意表をつくように、思いもかけないものにカメラを向けることもあった。自分なりの作品を、境地を、と懸命に模索していたのであろう」（水越武写真集『山の輪舞』より）と語っています。

当館では2006年に「水越武写真展～大地への想い」を開催し、同展に出品された24点の〈穂高〉シリーズを作者より昨年ご寄贈いただきました。先の新収蔵品展では一部しか展示できなかったこれらを第4期常設展（11月18日～1月25日）にて一堂に紹介いたします。

（豊橋市美術博物館学芸員　丸地加奈子）

雪稜アルプス／1970年撮影



結氷穂高北アルプス／1967年撮影

参考●「地平線への夢」水越武／「自然へのパスポートをもった写真家」杉本誠（『水越武写真展～大地への想い』カタログより）

編集後記

人は生まれ育つ環境のなかで、知らないうちに感性を磨き人間性を育みながら成長します。空、雲、風、太陽、木、街・・・衣食住、日常繰り返される当たり前のこと。そのなかで何か非日常のことがちょっと欲しい時、美術博物館を思い出してください。そんな所になってほしいと微力ながら私達は願っております。（そのためにも新しい美術館が欲しいです。）

伝統的な現代日本画である上村家三代の展覧会が、先ごろ盛会のうちに終わりました。また友の会の研修旅行では違った傾向のアートにたくさん触れて、アートとは？美とは？答えはとても出せませんが、皆さま楽しく満たされた時を過ごしました。私は新しいアートには四次元の観念が入るのではないかという気がしております。（神野能生子）

【表紙作品】
「実業家双六」（部分）　豊橋市美術博物館蔵
ー新春遊戯ーすろごく展より
（12/13～1/25二川宿本陣資料館にて開催）

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第70号
編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会長　原 文成
担当副会長　宮田正人
編集長　鈴木伊能勢
編集委員　神野能生子　福島陽子　山崎恵子
協力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成20年11月20日発行（5月・8月・11月・2月各20日発行）
平成10年3月17日　第3種郵便物認可 定価200円
※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。